

中村武羅夫

與謝野晶子女史



與謝野晶子女史



晶子女史は天才である。一度び此の天才の胸を徹したる声を聞けば、歌も単なる歌ではない。総ゆるものを絶して、自らの感情を、大胆に、率直に、掩わず、隠さず、偽らずして歌うところ、女史の歌には、歌として以外更に尊い生命がある、權威がある。

余は此の女流天才歌人に面会するのを、此上なく光榮とした。而も其会ったのは唯の一度、それもほんの短時間、十分ぐらいであった。然し、余は其十分間に、微細

なる注意を以って女史の総べてを見た意りである。

女史は、紺緞の単衣を着て、縞子とメリンスの腹合せの帯を締められた。不断ではあるが、極めて無雑作な風采で、髪なども、後ろの方に束ねて、そそけて居た。柄の小さい、顔の少し長味な、色の白い人で、見た所美人の方ではない。始絡うつ向いて、右の手を前に畳に突いて、それをもじもじ動かしながら、其指先を凝と見詰められる。決して、顔を上げて、人の顔を正面に見ると云うようなことをせられない。言葉はねちねちした切れの悪い調子である。そして、極めて謙遜の言葉を使われる。



一見した所、之れがああした奔放な、熱烈な情の高調を歌う天才歌人であるか、此の人の何所からああした声、ああした響きが出て来るのであろうと、疑われる。

余は女史を今少し、天才的に熱烈な所のある人と思つて居た。所が、其顔、其目、其態度、——歌に見るが如き天才的の所が少しも見えない。一見平凡なる只一個の婦人に過ぎない。世帯やつれた姿も振りも関わない世話女房である。あの熱烈な、何物をも焼き尽すの概ある情熱は、此の人の何所に蔵されて、何所から迸り出されるのか、乳呑み子ある婦人に能く見る、少し襟元のはだか

った、チラと見えた白い胸先、単衣の外に明らかに分る高く盛れた乳の辺り、余は、何か鋭利なる刃物を以て突き破って見たいような気がして其所より迸り出ずる紅いの熱き血汐、ああ、其血汐の中に、あの情熱は含まれて居るのである。要するに如何なる天才の生命も、其中を流るる熱い血の中にあるのだ。膚一重の外は、天才も凡才も何の変りはない。

女史は極めて謙遜な人である。あさましい婦人の見えも虚栄もない。余は晶子女史ぐらい、女として如何にも女らしい人は少ないと思う。



大抵の女なれば歌の一首も作り、小説の一篇も書けば、最うそれで閨秀作家を気取り、心の矜りを人前にもチラ付かせる。其所が女の浅猿しい所である。養い難い所である。女と云う動物は謙讓の美德を、全然解するの能力なき動物である。女史には、其厭な、女の浅猿しき虚栄と矜りがない。殆んど、自分の天才であることも、歌人として一流の地位にあることも知らないと言った風である。余は婦人としての人物の美しさを、女史に於て、始めて之れを見た。姿や、様子は縦しや何うあらうとも、其人格にして清く高ければ、人間として之れ程床しい、

尊いことはない。

余は、女史に面会して、此の天才女流歌人が、何の不平もなく、不満もなくして、平凡の婦人の務むべき主婦の務めに服して居られるのを見て、心から床しく思うと同時に、此の天才をして平凡の婦人と同じ務めに服せしめなければならぬ、人間の約束を悲み、天才其物のために其悲惨を嘆じた。天才をして人間の約束に従わしめるぐらい悲惨なことはない。家庭を持ち、子を産み、之れを育てるは、愚衆婦人の仕事である。天才には他に、より以上の尊い意味ある要求がある。天才は個人の独占す

べきものではない。

余は女史の歌に依って、人間の約束の為に束縛されたる、天才の悲しい叫び声を聞くことがある。そして、其声は何時も余の胸に哀切なる響きを伝える。余は、其度に天才者の悲惨なる運命を思つて泣く。

其歌に依って其人を尊敬し、其束縛されたる悲痛の声を聞いて、未だ見ざる天才の爲めに、衷心より悲しんだ余は、一度び接して其人物の床しきを思つて、更に尊敬の念を加え、其束縛されたる天才の姿を見て、更にそれを悼むの念を増した。



日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館